

「死者のために祈ってももはや手遅れなのか」

2021年7月25日  
神戸国際キリスト教会  
牧師 岩村義雄

主題聖句：使徒言行録 16 章 31 節「二人は言った。『主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。』』（『聖書協会共同訳』）

<序>

第2次熱海土砂災害ボランティアで、遺体が安置されている南熱海マリンホールに行った。19日(月)に18体のご遺体が安置されている施設を訪問するために、熱海市役所に問い合わせたところ、拒絶された。

かつて東日本大震災直後に仙台市で合同慰霊祭が営まれた際、役所は遺族を集めていた。そこへ袈裟を着た住職たちがお経を唱えるために入って来たところ、役人たちは政教分離を貫きたいのか、すぐに出て行った。阪神・淡路大震災の時点ではそのような事例はなかった。宗教者を排除することがきっかけになって、神戸市垂水区で西方院、柿本人麻呂神社、神戸国際キリスト教会の宗教者と、非常勤で関係があった神戸松蔭女子学院大学の教授たちと「阪神宗教者の会」を2011年4月に立ち上げ、10年近く継続してきている同会に、一昨日の23日、メディア記者もオンラインに参加した。

筆者の「熱海よ、お前もか」のメッセージ後質疑応答で活発な意見が出された。行政が死者と立ち会うことすら規制するという、近年の硬直化した傾向に対して問いがなされた。憂慮すべき事態に、「ひのきしん」で有名な天理教の金子 昭教授も発題が加わった。

今朝は、プロテスタント教会、つまり宗教改革者マルティン・ルター[1483-1546]以降、葬儀後の死者供養がないことは聖書的にどうなのかをご一緒に考えてみたい。

- (1) 活動中に気づいたこと
  - a. 技術偏重時代に宗教者も沈黙 2
  - b. 考えさせられたこと 2
  - c. 共同体 2
- (2) 救援もせず、自己救霊でいいのか
  - a. キリスト者は無関心、無知、自己救霊で終わってよいのか 3
  - b. エリート志向 3
  - c. 今また日本は国家の強力な統制下におかれた 4
- (3) 災害の死者は霊界で実在しているのか
  - a. プロテスタント神学は死者を顧みない自己中 4
  - b. 神は生者と同様死者をも心にかけている 4
  - c. 死んだ家族も救われる 5

## (1) 活動中に気づいたこと

### a. 技術偏重時代に宗教者も沈黙

熱海土砂災害も人災。砂防ダムが原因。技術過信の人類社会に、自然は呻いている(ローマ 8:22)。

「ドイツの壊滅的な洪水、忍び寄る気候変動の影響」とメディアはうそぶく(NATIONAL GEOGRAPHIC 報道 2021年7月21日)。ドイツおよび近隣諸国で洪水により180名が亡くなった。中国河南省洛陽にある伊河灘ダム。堤防が長さ20メートルにわたって決壊している。7月21日午前6時、中国人民軍は緊急放流のためダムの一部を爆破した。

気候変動が原因なのか。ドイツにしても、ダムが決壊したことをなぜ最初に報道しないのか。ダムは川を「死んだ川」へと変貌させ、災害時には生命・財産を脅かす存在である。アユの存在は川に本質がある。水がコンクリートによって汚染される。川魚は生存に赤信号と呻く。したがって科学者、研究者、政府は、都市開発の状況で、洪水が発生することを、精査すべきではないか。公共事業による人災に本腰を入れるべきではないか。

国は戦前戦中も能率化・合理化を推進した。テクノクラシー国家を目指してドイツを模倣した。巨大公共事業の一つに朝鮮満州国境沿いの水豊ダム建設がある。日本帝国主義の専門技術者は、アジア諸国の効率的な植民地化に狂奔、政策にダムをあげ東南アジアに建設(拙論『中外日報』『随想随筆③』(2020年11月13日付)。世界最大の中国三峡ダムに、日本の代表企業も技術投資した。

自分達の子ども、孫にまで賠償の負債を負わせないために、再生可能エネルギーへ。神戸国際支縁機構は「田・山・湾の復活」に取り組み続ける。

### b. 考えさせられたこと

国家が法と秩序を守らず、人権をないがしろにしているなら、荒野の預言者として、神の言葉の代言人として沈黙すべきではない。たとえば災害の現場では、メディア、ボランティア、医療関係者が政治的判断で遮断され、72時間を経ても一切立ち入り禁止とされる。痛み、苦しみ、苦しさへの共振、共感、共苦の有機体、「縁」が、日本列島全体で過去のものとなろうとしている。コロナ禍前から統制が行き渡ってきた。他人の悲しみに寄り添いたくても通行禁止、立ち入り禁止、どこにいるかさえ「個人情報」として知らされない。みんなで試練を乗り越え助けあおうという義理、人情、隣人愛も無視される。なんでもが役所の許可、申請、登録に合格しなければ、安否も確認できない。役所の書類の細かい問いは、高齢者をはじめ民衆には冷たい仕打ちである。

### c. 共同体

いつしか共同体意識は薄れ、縦割りで融通がきかない複数の書類手続きに閉口する。医師は触診もせず、患者の顔を見ず、画面の数値だけで病名を告げ、処方箋を受け付け、会計に手渡す。時代とはいえ、薄気味悪い世になってしまった。

ボランティアで2回にわたり、熱海に共に行動した佐々木美和さん(大阪大学院特任助教)も語る。「目の前で幼馴染の家々が流される。家族が土石流にのまれても規制され手が届かない。家族に一目会いたくても、赦されない。最期の別れより専門家優位はなぜなのか。後悔する被災者には冷たい仕打ちが被災地でまかりとおるのはなぜか。背後に横たわる優先順位は、しらずに民衆も猛進する専門家至上主義ではないか。日本全体がコロナ禍にあっても、生身の死者と向きあう準備は奪われ。生きてきた人の最後の対面すらお上(かみ)がコントロールし、事務的な処理でその人の人生は終わる。しかし、死者は生きている『生きていて私を信じる者は誰も、決して死ぬことはない』』と語る(ヨハネ 11:26)。

「死んだらおしまいさ」ではなく、死者と生きとし生けるものと共生する永遠性、時間・空間の超越、共存のテーマを噛みしめたい。

## (2) 救援もせず、自己救霊でいいのか

### a. キリスト者は無関心、無知、自己救霊で終わってよいのか

この世は過ぎ去るのだからと、現実の悲劇には目を向けない。教会内は二元論ではないか。政治、思想、社会運動などへの責任倫理が麻痺していないか。

フラワーデモの性的虐待を受けた幼子たち、限界集落で災害のため家屋、一家の大黒柱を失ったシングルマザー、ワクチンの連絡も届かない路上生活者たち、いと小さいそんな貧しい者に教会の敷居は高い。三位一体、聖餐、受洗の sacrament、什一返金などについて聖書からちゃんと語ることができる聖職者にお目にかかったことはない。プロテスタント教会は神さまからのプレゼントだと、信仰を無料で受け取らせれば取り決めに盲従させる。そこにあるのは恵みではなく、聖職者の生活応援、信者拡大、奉仕のサロンになっている。神からのプレゼントは「小さくされた人々のため」への「行い」であり、信仰がなくても、だれであっても良心に従って、行なうはずである。「私たちは神の作品であって、神が前もって準備してくださった善い行いのために、キリスト・イエスにあって造られたからです。それは、私たちが善い行いをして歩むためです」(エフェソス 2:10)。恵み漬けのプロテスタント教会の特徴は知っておく必要があろう。聖歌隊や讃美による陶酔、美辞麗句の長い祈り(ローマ・カトリック教会、アラブ・オーソドックス、東方教会にはない)、厳粛な会堂建築で罪人をひざまずかせるリタージェーに陶酔している。「見せかけの長い祈りをする。このような者たちは、人一倍厳しい裁きを受けることになる」(マルコ 12:40)。

日本には約 8,000 の教会、受洗者約 7,000 人があり、約半数の 3,500 人が海外帰国者とされる。しかし、多くの帰国者は教会に繋がっていない。日本人のクリスチャンの平均寿命は約 2 年半。(「クリスチャン情報ブック」いのちのことば社)。この教会に救いはないと受洗者は遁走する。なぜならプロテスタント教会は、うわさ、悪口、他者への好奇心に満ちており、生気のないプロテスタント教会となっている。とりわけ教会ジプシーなる現象がある。

コロナ禍に対して、今から 100 年前のスペイン風邪の時と同じように、何もせずにパンデミックが過ぎ去るのを待つのか。コロナ禍のため一番の被害者は、障がい者、精神病院という隔離施設、認知症でクラスターが発生し亡くなっている事実があるにもかかわらず、教会の中では、「2 回目のワクチンがすみやかに終わり、コロナ禍から逃れますように、神様にお祈りしましょう」という声しかあがらない。「医療関係者、専門職の人、支援者はたいへんだ」という報道の繰り返しも祈禱の言葉もめずらしくない。そんな偽善的、優生思想的、トリアージに対する沈黙していることができず、心あるキリスト者がなんとかできないものかと、取り上げるやいなや、「言葉を言うのはたやすい。もっとやることがあるだろう」と。「善意だけでは世の中は変わらないから、やめておけ」とたしなめる声が教会の古参の信者からあがる。あるいは、年配の長年忠実に教会に通っている信者が、「変革の代案を出せないなら訊きたくもない」という意見がまかり通る。そうした雑音がくすぶって、聖俗を区別するプロテスタント宗教は何もできないのではないだろうか

### b. エリート志向

キリストは福音と出会う機会を得た私たちだけを愛していると考えるのは利己主義と自己中心主義である。2016 年 7 月 26 日未明、相模原市の障がい者施設「津久井やまゆり園」で痛ましい事件があった。「障がい者は生きている意味がない」と入所者 19 名を殺した。殺された障がい者の名前が出ていない。一方、メディアは、ヘイトクライム、ジェノサイドの加害者の名前をあげて、有名人にした。被害者の名誉

回復をせずに、倒錯行為である。それは優生思想という歪んだ世界観に基づくものであった。日本においても「単一民族意識」という優生思想がある。大正期の 1920 年代から登場した。長谷部言人(ことんど)東北帝大医学部教授は日本列島各地の人間の身体測定から、アイヌ民族は石器時代人ではないと主張した。日本の石器時代人こそが真の日本人と言う。優生学の学会の立ち上げにつながった。(拙論『災害と聖書の神—貧しい人・被災者は幸いである』(2019年6月9日3頁)。

土着化を目指す明治初期の武士道に接ぎ木されたキリスト教も、優生思想指導から逃れられなかったのではないだろうか。使徒パウロは「真生(ほんとう)の武士にして武士道の精神を体現したる者」とみなされたのである。(『内村鑑三全集』第25巻1920年362-363頁)。

### c. 今また日本は国家の強力な統制下におかれた

明治に一举にキリスト教信者は拡大した。それは、1885年から1890年の「欧化主義」の下で宣教師たちの宣教による。1873年、日本人プロテスタント信者はわずか59名。1891年の教会員は3万1361名になっている。しかし、明治政府の指導者たちは、1889年に明治憲法を發布し、翌年教育勅語によって国粹主義を植えつけた。その結果、キリスト教の成長は止まった。1890年代に反米感情が沈静化すると、経済が進展し、ホワイトカラー層が都市に増えてきた。拡大も可能になったが、全体主義の台頭によって、阻まれた。戦後、キリスト教の「西洋性」は日本人の興味をそそり、英語を学ぶきっかけでプロテスタント教会も拡大した。しかし、「外来宗教」として日本になかなか土着できていない。今、熱海の遺体安置所で日本人はキリスト教を拒否していると言えまいか。

なぜか。

## (3) 災害の死者は霊界で実在しているのか

### a. プロテスタント神学は死者を顧みない自己中

150年前のアリカンボードは、外国宣教師採用の条件として、基督を信ぜざる外国人の靈魂は悉く永遠の刑罰に預かるとの信条を信ずるを必要として居た。……此の教理を信ぜざるものは決して宣教師として推薦せぬと断言して居た。(『建設的基督論』久布白直勝 新人 16巻11号47,48頁)。

仏壇、位牌、偶像を処分することがキリスト教入信への絶対条件であった。先祖崇拝をかたくなに拒む宗教性はあちらこちらで摩擦、村八分、断絶を起こした。村八分の残りの二分は火事と葬式である。八分とは、成人式・結婚式・出産・家の新築・病気の看病・水害の復旧・年忌法要であった。葬儀後の死者供養はダメと宣教師は執拗に教えた。死者を十分には顧みない「反家族的」宗教として、キリスト教に日本人はなじめなかった。だからプロテスタント教会は葬式において、先祖崇拝をしないという理由で長年の村の風習から脱線せざるを得なかった。イエスを救い主、原罪の贖い主と告白しないと永遠のいのちをいただけないと、西方教会の神学の父アウグスティヌス[354-430]の教理を信じている。つまり、生前にイエスを救い主と告白しないと、死後地獄に落ちると約1500年近く信じてきた。では、イエスを知らずに、十字架の御血潮の恩寵を拒絶した者は永遠の火の責め苦にあっているというのは聖書的なのだろうか。

### b. 神は生者と同様死者をも心にかけている

イエスは現世と霊界双方の主である。

「キリストも、正しい方でありながら、正しくない者たちのために、罪のゆえにただ一度苦しみました。あなたがたを神のもとへ導くためです。キリストは、肉では殺されましたが、霊では生かされたのです」と「正しくない者のために」導かれる方である(Ⅰペトロ3:18)。続く、文脈は次のように述べる。「こうしてキリストは、捕らわれの霊たちのところへ行って宣教されました」ということは、キリストは死後の「捕らわれの

霊たち」に宣教なされたことをどう考えればいいのか。先週、神戸国際支縁機構の水谷弥生さんが、会計の作業の合間に、米津玄師を知っていますか、と問われた。テレビをぜんぜん見ないので、「米津」はボクのひいお爺さんの姓です、ととんちんかんに答えた。するとパソコンで「死神」という短い動画を見ることをすすめられた。見て、めんくらった。「アジャラカモクレン テケレツツのパー」という呪文を唱える。すると死神はたちどころに去り、病人は嘘のように元気になる。国の内外の被災地で「ご臨終です」という医師の言葉に泣き伏しているご家族の前で無力感を何度も味わってきた。こんな呪文があるなら、使ってみたい、という不信仰だろうか、と思いがよぎった。私たちの世界に働きかける力をもつ靈魂や超自然的存在が住まう、別の世界が実在するのか。

キリストは福音と出会う機会を得た私たちだけを愛していると考えるのは利己主義と自己中心主義と言えないだろうか。優生思想である。しかし、神は生者と同様死者をも心にかけている。なぜなら死者に福音が告げられることが永遠のベストセラーである聖書は明言しているからである。

「死んだ者にも福音が告げ知らされたのは、彼らが、肉においては人として裁かれても、霊においては神のように生きるためです」の「死んだ者」(νεκρός ネクロス nekros<「死んでいる」の意>)とは、天国、つまりアブラハムの懷で神と共にある者ではないだろう。そんな闇のネクロスにも「福音が告げ知らされた」というキリストのはたらきを忘れてはならない(I ペトロ 4:6)。

### c. 死んだ家族も救われる

「また私は、死者が、大きな者も小さな者も玉座の前に立っているのを見た。数々の巻物が開かれ、また、もう一つの巻物、すなわち命の書が開かれた。これらの巻物に記されていることに基づき、死者たちはその行いに応じて裁かれた」(黙示録 20:12)。

命の書に連なる名を決めるのは究極的には神である。プロテスタント教会の宣教師、牧師、神学者が決めるのではない。現世と霊界双方の主なる御方が決めることを僭越にも 500 年近くプロテスタント教会は教えてきた。

10年前の東日本大震災において津波で溺死した死者。私たちの世界に働きかける力をもつ靈魂や超自然的存在が住まう、別の世界が実在するのではと被災地は筆者に示唆した。「よく言うておく。あなたがたが地上で結ぶことは、天でも結ばれ、地上で解くことは、天でも解かれる」、とイエスは言う(マタイ 18:18)。1995 年以降、毎週、講壇から聖書の説教をしてきた。『人はパンだけで生きるものではなく 神の口から出る一つ一つの言葉によって生きる』と、聖書のロゴスを真剣に語ってきたつもりである(マタイ 4:4)。しかし、本質的な真理が判っていなかった。死者の霊は物質のパンを食べることはできないが、神の言葉を食べることができる、という理である。

み言葉を流し出す管として、はっきり宣言したい。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます」の「家族」とは、キリスト教に入信しなかったとしても、もうすでに墓場に葬られていたとしても、無縁仏として不明であったとしても、生者が祈るなら、救われる(使徒 16:31)。それこそが福音であろう。

### <結論>

ひとり神の前で祈ろう。おのずと聖霊に押し出されるだろう。

毎週、神戸市の東遊園地(神戸市役所隣)で炊き出しをしている。生活保護も受けていない路上生活者が対象である。彼らにワクチンの手紙はこない。10 万円の特別支給もなかった。

キリストが半死半生の人を介抱した善いサマリア人の話をされた時、「行って、あなたも同じようにしなさい(ποιέω ポイエオー poieo)」,とされた(ルカ 10:37)。神について伝道し、信者を増やすのではない。

神が私たちに何を語っておられるのか耳を傾けよう。神に耳を傾けるために組織、資格、プロジェクトはいらない。ヨハネの福音書 10 章 15 節でイエスは「小さくされた人々」のために「命を捨てる」と模範を残された。賀川豊彦[1888-1960]は「一人は万人のために、万人は一人のために」と述べた。ひとりで祈る。おのずと聖霊に押し出されたらキリストが伴走してくださる。うつ病、ひきこもり、統合失調症のオクロス(民)が仕えている後ろ姿に励まされる。

心底罪から解放されたという内的変化がないから。自発的な行動に転化する自由、確信、愛のかけらもないプロテスタント教会は神の国ではない。イエスと共食できるトポス(場)は荒野である貧者の住まい、抑圧されている底点の階級、ハンディキャップの呻きがあろう。イエスと共に家族が共食する。孤食ではないのだ。死んだお父さんも、おばあちゃんも、みんないっしょだよ。神の国である。

党派心、高慢、ヒエラルキーの会堂から荒野を目指し、孤食の被災者と共食しよう。知らなかった家族と出会うよう。

説教原稿を翌週、神戸国際支縁機構の村田充八理事に校正していただきました。また不明瞭な箇所について訂正していただきました事務局の翻訳家徳留由美氏、佐々木美和氏にも感謝します。